

キャラクター名

プレイヤー名

ノーラ

メインクラス	アコライト	Lv.1:		レベル	1
サポートクラス	メイジ	Lv.1:	メイジ	性別	♀
称号クラス				年齢	18
種族	フェアリー			境遇	没落
出自 (効果)	邪妖精			目標	復讐

	筋力	器用	敏捷	知力	感知	精神	幸運	
基本値	7	5	12	9	10	11	8	
ボーナス	2	1	4	3	3	3	2	
クラス修正	0	1	0	2	1	2	0	
他修正								
能力値	2	2	4	5	4	5	2	

HP	28
MP	36
フェイト	5

	装備品	射程	命中	攻撃	回避	物防	魔防	行動	移動
右手	ライトメイス	至近	-1	5	0	0	0	0	0
左手	ラウンドシールド		0	0	0	3	0	-1	0
頭部									
胴部	クロスアーマー					3			
補助									
装身具	聖印								
	能力値		2	0	4	0	5	8	7
スキル									
その他									
	総計(右)		1	5					
	総計(左)		2	0	4	6	5	7	7
	総計(両)								m
	ダイス数		2 d	2 d	2 d				

	能力値	スキル	その他	合計	ダイス数	
トラップ探知	4			4	+ 2 d	
トラップ解除	2			2	+ 2 d	
危険感知	4			4	+ 2 d	
エネミー識別	5			5	+ 2 d	
アイテム鑑定	5			5	+ 2 d	
魔術判定	5			5	+ 3 d	
呪歌判定	5			5	+ 3 d	
錬金術判定					+ d	

現在重量：	0	
最大重量：	7	所持金：0 預金・借金：

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
フェイ;フェアリー	★							
効果：	呪歌判定+1d、幸運基本値-3							
プロテクション	2	3	DR直後	20m	単体	自動成功	防御中1回	
効果：	対象が受ける予定のダメージに-[SLd]							
ヒール	1	4	メジャーアクション	20m	単体	魔術判定		
効果：								
コンセントレイション	1		パッシブ		自身			
効果：	魔術判定+1d							
マジックブラスト	1	3	ムーブアクション		自身	自動成功		
効果：	「タイミング:メジャーアクション」「対象:単体」の「分類:魔術」の「対象:単体」を「対象:範囲([《マジックブラスト》のSL×2]体)」に変更する。この効果はメインプロセス終了まで持続する。							
ミュウストノウリッジ	1		パッシブ		自身			
効果：	神話や伝説に関する事柄について、知っているかどうかの【知力】判定に+1dする。							
ファーストエイド	1		メジャーアクション	至近	単体	器用		
効果：	対象が戦闘不能の時に有効。難易度10の【器用】判定を行なう。その判定に成功した場合、対象の戦闘不能を回復し、【HP】を1する。なお、対象は行動済となる。							
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								

気の向くままに妖精の里を出て、ヒュリンの街に行った際、子供が泣いていたのでどうしたものかと困っていたところ、それを見た大人たちはあなたが子供を泣かせたと思ひ込み、石を投げて迫害し、追い出した。

それ以来あなたはエネミーとなって彼らに仇を成すようになった。

しかしあるとき、あなたがどれだけ破壊・暴行をしようとも逃げだしも反撃もしないプリーストと出会い、しばし交流するようになった。その者は自らが吸血鬼であり、しかし太陽神の加護をもったために妖魔にも人間にもなりきれないと言いながら語った。

いつしかその吸血鬼と仲良くなり、アコライトにあこがれたあなたは心を入れ替え、新人冒険者がよく通りかかる森で、無料で治療を行なうようになった。するとどうだろう。その小さな慈善活動は認められ、あなたは神の加護としてフェイトを取得したのだ。

あなたとその吸血鬼は嬉々として、さらに治療に精進した。しかしそんな日々は長く続かなかった。あるとき、近くの街の防衛網が魔族によって突破されたのだ。多くの人々がそこで命を落とし、僅かに生き残ったものは森に逃げ込んだ。吸血鬼とあなたは彼らの怪我を治療していたが、パニックになっていた彼らは日頃彼女達に怪我を治してもらっていたことも忘れ、訴えた。

「その吸血鬼が街の衛兵の入れ替わり時間を教えたんじゃないか？」

「そういえばあの妖精、前に冒険者を襲っていたぞ！」

彼らの恐怖と不満はあなたと吸血鬼に注がれた。一步、また一步と彼らは歩み寄る。そのときである。魔族の軍勢が森にまで来たのだ。

隻眼のフォルネウスが率いるレイエ及びパフォメットの舞台が差し迫っていたのだ！

逃げ惑う人々。しかしあまりにも混沌とした状況で、まだ幼い子供が突き放され、彼らに置いてかれる。そんな子供にレイエは無慈悲にも矢を放つ。

あなたにとって悲劇の瞬間であった。あなたの友人であり、恩人でもある吸血鬼が、その子供を庇い、心臓を貫かれたのだ。

何が起きたか理解できなかった。ただ吸血鬼は淡々と、「その子を連れて逃げるんだ」と呟き、そのまま動かなくなった。あなたは一心不乱になって吸血鬼が命がけで守った子供の手を握り、ただひたすらに逃げ続けた。羽が痙攣し動かなくなるほど飛んだならば、その小さな足で走り続けた。1日中、いや一週間以上ただずっと逃げ続けた。あるとき、ハッとして後ろを振り返ってみると、そこに子供の姿はなかった。あるのはあなたが握っていた小さな腕だけで、それは噛み千切られたかのごとく、荒々しい断面を残していた。